



福島まで（新幹線）▶▶▶▶ 大学まで

東京から約1時間40分 JR／東北本線金谷川（かなやがわ）駅下車 徒歩10分
 小山から約1時間10分 バス／福島駅から二本松方面行き乗車
 宇都宮から約45分 福島大学下車 徒歩10分
 仙台から約30分
 山形から約1時間10分

高速バス

仙台駅から福島駅まで約1時間20分
 会津若松駅バスターミナルから福島駅まで約1時間30分
 新潟駅から郡山駅まで約2時間50分

茨城方面からお越しの場合

高萩駅よりJR常磐線特急でいわき駅まで約35分
 日立駅よりJR常磐線特急でいわき駅まで約45分
 水戸駅よりJR常磐線特急でいわき駅まで約1時間10分
 いわき駅より高速バスで福島駅まで約2時間

入試に関するお問い合わせ先

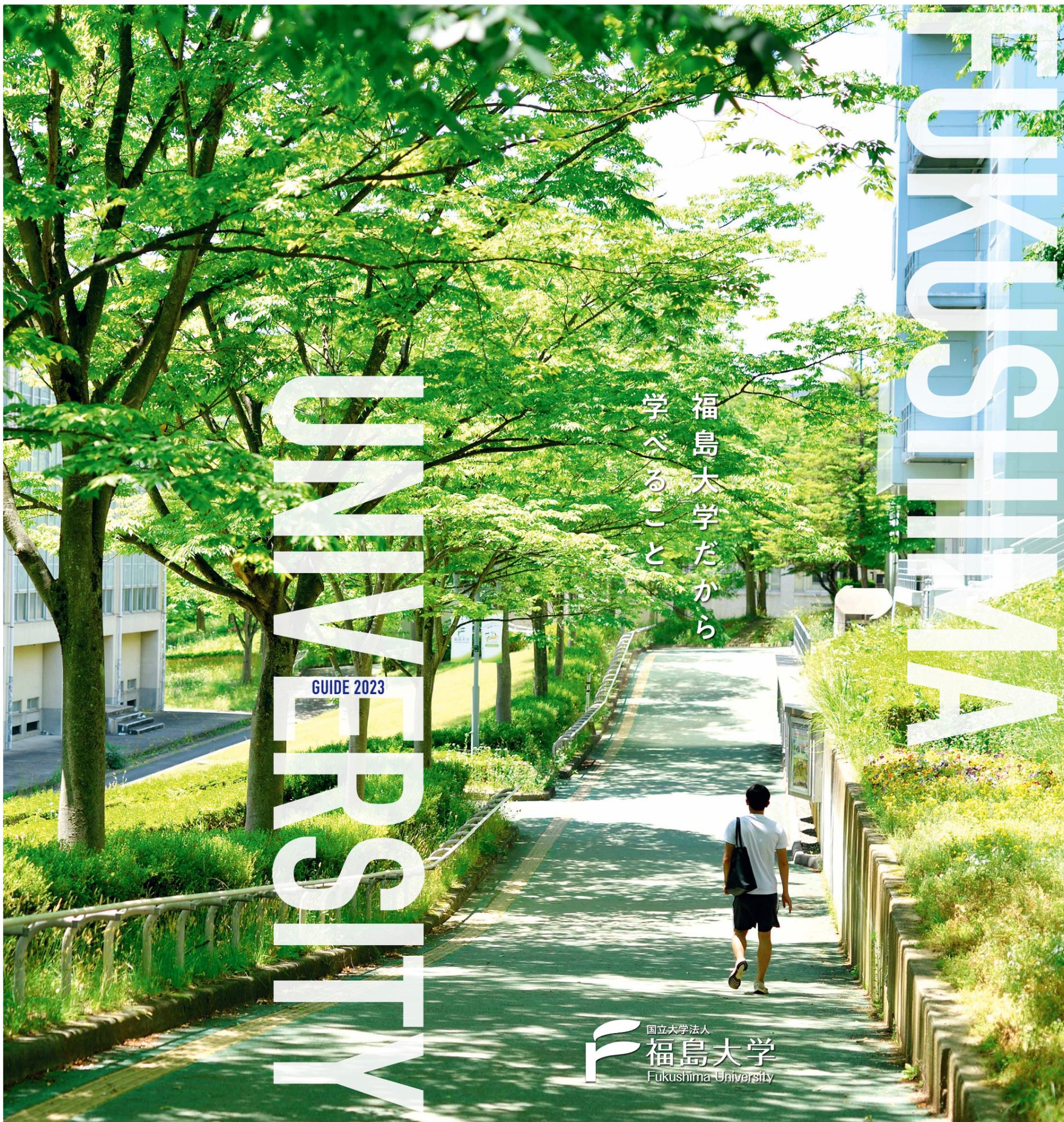
福島大学入試課 〒960-1296 福島県福島市金谷川1番地
TEL. 024-548-8064（平日/9:00~17:00）
 ※お問い合わせは、できるだけ受験者本人が行ってください。



福島大学公式マスコットキャラクター
めばえちゃん 「福島大学 めばえちゃん」で検索!
プロフィール
 4歳の女の子。4月7日生まれ。
 出身地 福島県阿武隈高地
 性格 のんびり屋 いつもニコニコ
 お仕事 福島っ子の応援・福島県産品のPR
 福島県の復旧・復興のお手伝い
 福島大学のPR

福島大学入試課
 公式LINE

※冊子内の画像は、主に2019年に撮影したものであり、2020年以降に撮影した画像については、撮影時のみマスクを外しています。



UNIVERSITY

福島大学だから
 学べること

GUIDE 2023

国立大学法人
福島大学
 Fukushima University

地域と共に21世紀的課題に 立ち向かう福島大学

福島大学は、福島県唯一の国立大学法人として、長きにわたり地域とともに歩みを進めてきた大学です。本学は、人間発達文化学類、行政政策学類、経済経営学類、共生システム理工学類、そして令和元年度に新設した食農学類の5学類からなる総合大学で、各学類は、学問分野に沿って細分化されたコースで編成され、それぞれカリキュラムの下で学生が学び、専門性を深めています。

本学は学際性を重視しています。独自の「学類」制は、一般的な「学部」と比べてカリキュラムに柔軟性を持たせることができます。他学類の授業を受講するなどして、今日強く求められている幅広いものの見方や多視点的な学びを得ることを目指しています。教育理念を「問題解決を基盤とした教育」とし、「解のない問いにチャレンジできる人材」の育成を目標に掲げています。今から11年前の東日本大震災、それに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故で、本学は発災直後から、避難所の開設と運営、県内外での学生ボランティア活動、地域の放射線の測定、被災地の実態調査など、多面的に支援活動を行い、これによって大学はたくさんの学びを得ました。

「問題解決を基盤とした教育」という理念には、震

災復興の様々な活動で得た知見を教育課程に組み込んでいくと同時に、教科書の中に閉じ込められている体系的な知識を一方向的に教えるだけではなく、学生自らが複雑な現実社会に飛び込み、一人ひとりが自分なりのアプローチで問題を発見し、仲間とともに探究し合い、自分自身の生き方や社会のあり方を熟考してもらいたいという願いがこめられています。この理念を体現するカリキュラムとして、一つに「地域実践特修プログラム」をあげることができます。これは、主として講義科目「ふくしま未来学入門Ⅰ/Ⅱ」とフィールドワーク科目「むらの大学」、並びに、問題探究科目で学んだ事柄を、自主学修プログラムや各学類の専門科目に広げていく科目群です。大学の教室で、また、浜通りの被災地で、様々な講師や現地の人々から学び、震災の様態や復興の歩みなどを立体的に学ぶことができ、これを通して被災地の復興に貢献するだけでなく、新しい社会のあり方を考えられるイノベーターの育成を目指しています。

もう一つの「グローバル特修プログラム」は、語学学習の強化、国際交流機会の提供、海外留学の支援などを通して、グローバル人材の育成を目指す科目群です。本学学生が、海外留学生の福島県内視察をサポート

トし、意見交換・交流を行う体験型被災地学習「Fukushima Ambassadors Program (F.A.P.)」なども行っており、福島の復興にも大きく貢献しています。

福島大学は、福島市南部の金谷川キャンパスに全ての学類がまとまって設置されており、主として1,2年生が受講する基盤教育科目は、学類を超えた多様な学生と学ぶこととなります。課外活動(部活動、サークル活動)も盛んで、様々な活動に取り組む学生たちが出会い、そこからまた新しい活動が日々生まれています。本学は、開学以来学生の自主性を尊重する伝統が貫かれ、加えて、学生と教職員が互いに権利を守り、協力して大学を発展させる自治の精神が生きており、キャンパスの中には社会の多様性や自律性を考える機会がたくさんあります。大震災を乗り越えてきた本学は、11年を経ても様々な困難や課題に寄り添う姿勢が息づいており、今なお活発なボランティア活動にその片鱗を見ることができます。

さて、2年程前から新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、人々の健康や社会生活のみならず、国際関係に至るあらゆる面で深刻な影響を与えました。本学では感染拡大を防止しつつ、大学の教育機能とを両立させるため、遠隔授業の活用や本学独自の経済支援や食

糧支援、さらには管理運営においても様々な工夫と対策を行ってきました。

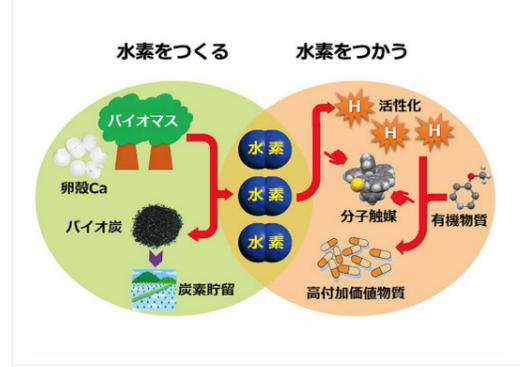
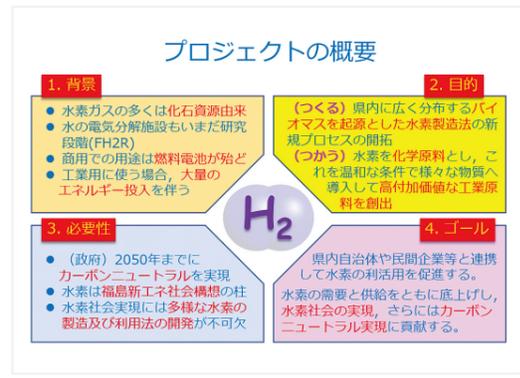
今現在、ウクライナへの攻撃により、国際平和を維持してきた枠組みが大きく変わろうとしています。本学とウクライナは環境放射能に関わる共同研究を進めてきた関係にあり、大学としてウクライナのためにできることを模索しています。福島大学は大震災や新型コロナウイルス感染症という困難に直面して、大きな学びを得て成長してきた大学、言わば「レジリエンス(復元力・反発力)の大学」ともいえるでしょう。厳しい状況の中で、国の最高学府としての英知を結集し、現実の課題を創造的にのりこえていく人材を社会に送り出すことを目標に掲げています。

「福島大学でしか学べないこと」がたくさんあります。本学での学びや経験は、よりよい自分自身のあり方、よりよい社会のあり方を実現する基礎となります。共に福島大学で学びましょう。

福島大学学長 三浦 浩喜

INDEX

- 01 学長メッセージ
- 03 forR プロジェクト
- 07 「解のない問い」にチャレンジ
- 09 地域に学ぶ
- 13 世界で学ぶ(国際交流)
- 15 自分を知る・未来を考える
- 17 学類・コースINDEX
- 19 人間発達文化学類
- 21 カリキュラムの特長
- 22 学類長メッセージ・教員紹介
- 24 実習ビックアップ
- 25 コース紹介
- 29 行政政策学類
- 31 カリキュラムの特長
- 32 学類長メッセージ・教員紹介
- 33 1年次の学び
- 35 2年次の学び
 - 地域政策と法コース
 - 地域社会と文化コース
- 37 学びのかたち
- 38 3・4年次の学び
- 39 夜間主紹介
- 41 経済経営学類
- 43 カリキュラムの特長
- 44 学類長メッセージ・教員紹介
- 45 経済学コース
- 47 経営学コース
- 49 コース横断プログラム
- 51 共生システム理工学類
- 53 カリキュラムの特長
- 54 学類長メッセージ・教員紹介
- 56 1年次の学び
- 57 コース紹介
- 61 食農学類
- 63 カリキュラムの特長
- 64 学類長メッセージ・教員紹介
- 65 1年次の学び
- 66 2年次の学び
- 67 コース紹介
- 69 2年後期～3年次の学び
- 71 大学院
- 75 キャンパスマップ
- 77 施設紹介
- 79 めばえる福大生
- 81 STUDENT'S LIFE
- 83 サークル紹介
- 87 就職・進路支援
- 88 進路状況
- 89 入試データ
- 90 学費・奨学金制度
資料請求



[foR-F プロジェクト]

■ ゲノム科学・技術を援用した栽培・発酵最適性イネ系統の開発基盤研究

食農学類: 松田 幹(代表)、松岡 信、小山 良太、藤井 力、高橋 秀和、吉田 英樹、菅波 真央、客員教授: 北野 英己、吉田 晋弥

研究目的、成果報告

研究対象とするイネ(米)は、麴カビ (*Aspergillus oryzae*) を生育させ酵素を作らせる(麴を製造する)ための優れた発酵素材作物であり、味噌と日本酒の醸造のみならず、飲料や漬物、調味料にも用いられています。本研究では、栽培農家にとって、また醸造家にとっても好適な発酵素材用米を開発するための学術基盤を構築することを目的としています。既存の酒造好適米系統を親株として作成された酒米変異株、および栽培特性が異なる酒造好適米系統をかけ合わせた酒米交配株について、総計40系統・全4000株を用いて地域の連携協力農業法人の水田で栽培し、苗の成長や出穂、開花などの生育特性を調べました。生育の良好な早生の性質を持つ系統を中心に選抜して次年度の栽培に用いる種籾を確保しました。また、発酵最適性の主要要素である製麴適性について、麴の生育や酵素生産性など米の製麴好適性をできるだけ少量で評価できるように製麴条件を改良して、これまでの最低必要量の1/10以下でも同等の評価が可能なる方法を確立しました。

[foR-F プロジェクト]

■ 脱炭素型エネルギーシステムの構築 水素をつくる・つかう技術の多様化

共生システム理工学類: 大山 大(代表)、浅田 隆志

研究目的、成果報告

世界中の国々はカーボン・ニュートラルへシフトしています。日本でも、特に福島県は利用時にCO₂を発生しない“水素”という新エネルギーに注目し、全国に先んじて水素社会の実現に挑戦しています。私たちは、木材等の生物資源(バイオマス)から水素を製造する手法、製造した水素を化学原料として様々な物質へ導入する手法を研究しています。これらの研究を通して、水素の普及拡大に貢献したいと考えています。

木炭を製造(炭化)する際には水素などの有用ガスが生成します。スギの炭化プロセスでは、炭化温度の上昇に伴い水素と一酸化炭素の生成量が増加することが分かりました。また、卵殻と一緒に炭化すると一酸化炭素の生成量が増加しました。一方で水素は安定な物質なので、化学反応に直接使うとハーバー法のように多大なエネルギーを要します。そこで、生体補酵素の分子構造を模倣した化合物を合成し、それを用いることにより温和な条件で水素が様々な物質へ導入できることを見出しました。

[foR-A プロジェクト]

■ SDGsを見据えた福島農産物のブランド化と健康寿命延伸～美味しさと健康を一つに～

食農学類: 平修(代表)、深山 陽子、牧 雅康

研究目的、成果報告

世界的な気候変動は始まっています。私達は、気象予測から今の農地で、未来に、何が採れるのかを提案しました。福島県産農産物の品質・美味しさ・機能性成分を見える化しました。

〈福島産お米〉アルギニン、ビタミンE、オリザノール、フィチン酸といった機能性成分の他、グリシンが米糠層および胚芽に多いことが発見となる。グリシンは甘味アミノ酸として知られている他、近年、睡眠の質を改善する物質として注目されている。(福島県産ブロッコリー)収穫時期で機能性成分のコエンザイムQ10やビタミンKの含有量に違いがあることを発見しました。

大学の応援以外にクラウドファンディングで研究の応援・ご支援いただいたことに感謝いたします。



[foR-A プロジェクト]

■ 風評被害に苦しむ中山間地肥育牛の再ブランド化プロジェクト

食農学類: 石川 尚人(代表)、平修、吉永 和明、原田 英美

研究目的、成果報告

飯館牛復活のための新たなブランド指標の検索を目的として、飯館村の和牛に給与濃厚飼料の約40%を高オレイン酸含有脂肪酸Caおよび米に置き換えた資料を4か月与え(試験区:3頭)、筋肉内脂肪中のオレイン酸およびラクトン類含有率を通常肥育牛(対照区:4頭)の値と比較しました。オレイン酸を含めた脂肪酸の含有率には両区の間には差は認められなかったものの、試験区においてはγ-Decalactoneおよびγ-Dodecalactone含有率が高く、γ-Decalactone含有率では有意差が認められた(図1)ことから、新たなブランド指標として香り成分のラクトン類が有力である可能性が示されました。

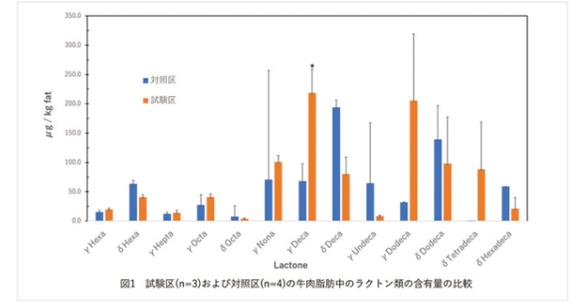


図1 試験区(n=3)および対照区(n=4)の牛肉脂肪中のラクトン類の含有量の比較

[foR-A プロジェクト]

■ 福島の酒類産業等の活性化のための酒類醸造・食品発酵に適した乳酸菌の開発研究

食農学類: 藤井 力(代表)、熊谷 武久

研究目的、成果報告

新型コロナ感染症防止の観点から飲食店の自粛や酒類提供の禁止等により、小規模製造場の多い福島県の酒類産業は大きな打撃を受けました。本課題では、福島の酒類産業等の活性化のため、県内酒蔵の酒粕等から単離したオリジナル乳酸菌活用によるブランド化を目指します。清酒の生もと酵母における乳酸生成への利用やワインの味を丸くするマロラクティック発酵等食品産業への利用を目指し、菌株の単離や特徴把握、適性試験などを進めています。



[foR-A プロジェクト]

■ 原発周辺の沿岸生態系におけるトリチウムモニタリング基盤の構築と動態解明

環境放射能研究所: 和田 敏裕(代表)、高田 兵衛

研究目的、成果報告

福島第一原子力発電所事故から10年以上が経過し、福島の海の放射能レベルは落ち着き、漁業復興に向けた動きが更に加速する一方、トリチウム等を含むALPS処理水の海洋への放出が2023年に予定されています。本研究は、福島沿岸海域でのトリチウムモニタリング基盤を構築し、ALPS処理水の沿岸生態系への影響評価や将来予測に資することを目的としています。船で採取した海水と魚類のトリチウム濃度は約0.1 Bq/Lと他の海域と同じであることがわかりました。今後とも客観的データの公表を継続し、社会に対するトリチウムの科学的理解の向上に貢献します。



福島大学の教育 「解のない 問い」に チャレンジ

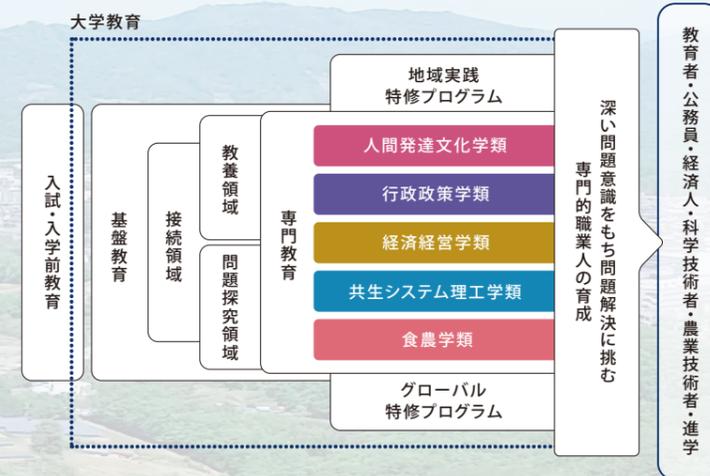
福島大学でしか 学べないことを学ぶ！

■福島県は、2011年3月東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故に見舞われ、甚大な被害を被り、「Fukushima」は世界に知れ渡ることとなりました。

■福島大学は東日本大震災以降、被災地のフィールドワークや地域おこし、自然再生エネルギー人材育成などに取り組み、ユニークな教育を進めてきました。

■世界も、日本も、地域も、大きな変化の中にあり、たくさんの課題を抱え、容易に「答え」を導き出せない問題に満ちあふれています。福島大学は「解のない問い」にチャレンジする学生を育てる教育を創造します。

福島大学における教育体系のイメージ



入学から卒業まで、 手厚く教職員がサポートします。

入学前教育—入学後のサポート—授業・学習—サークルやボランティア—留学などの各種活動—就職支援—卒業研究、などの4年間の学生生活を、一貫した体制でサポートしていきます。これによって、誰でも目標に向かって意欲的に大学生活を送ることができ、さまざまな活動にチャレンジできます。

情報教育を実践的に変えていきます。

現代の情報化社会にふさわしい教育体系に変えていきます。各自がパーソナルコンピュータを通して、学内外のさまざまな情報にアクセスし、情報の収集や分析、まとめ、プレゼンテーションを実践します。21世紀の読み・書き・算を身につけます。

初年次の基盤教育を充実させます。

1年次生が学ぶ初年次教育(教養教育)は、本学独自の教育体系です。高校までの学び(教科書に書かれた知識を学ぶ)を大学での学修(自ら主体的に学ぶ)につなげる教育体系として「基盤教育」を充実させました。入学後、大学での学びを身につけるためのスタートアップとしての「接続領域」、幅広い教養の基礎を形づくる「教養領域」、現実の問題をフィールドワークやグループを通し、時には一人で、時には学生間で意見を交わし課題を深く掘り下げ、そして解きほぐしていく「問題探究領域」が設定されています。



地域に学ぶ活動を強化します。

地域は多様な課題を抱えています。「地域実践特修プログラム」の「ふくしま未来学」を中心として、本学で学べる地域学習を広げ、地域の現状に触れ地域で活動する学習を増やし、問題探究・問題解決の力を伸ばします。

グローバル教育を充実させます。

学類を超えて、語学教育をグレードアップし、欧米圏やアジア圏との国際交流の機会や、海外留学を希望する学生にさまざまな情報や機会を提供します。

身につけた力を「見える化」します。

科目や科目群の学習目標を明示して、どのような能力を伸ばすのか、どのように伸ばしたのかを情報技術を使って「見える化」します。アクティブ・ラーニングや実践的な学習を取り入れ、学生の学びを活性化させます。

キャリア教育と就職支援を強化します。

本学で先進的に取り組んできたキャリア教育をさらに発展させます。自治体や企業との連携を強化し、インターンシップの機会や就職支援を充実させて、就職に強い人材、社会に出て魅力的な仕事ができる人材を育てていきます。

「解のない問い」にチャレンジ

地域に学ぶ

授業の動画を
配信中!



地域実践特修プログラム

ふくしま未来学

-福島だから学べること-

福島大学は「地域実践特修プログラム」を通じて、
未来を創造できる人材の育成と、原子力災害からの地域再生を目指します。
文系・理系の全ての学類が一つのキャンパスに集まる
福島大学ならではの特修プログラムです。

多様な視点で学ぶ福島の「いま」と「これから」

講義「ふくしま未来学入門」

5学類オムニバス講義で復興の最前線を知る

ふくしま未来学入門I

2011年の東日本大震災と東京電力福島第一原発事故は、
人びとの暮らしに甚大な影響をおよぼし、今なお現在進行
形の課題として私たちの前に存在しています。「ふくしま未
来学入門I」は、地域とともに歩む総合大学・福島大学の特性
を活かした、全5学類の教員によるオムニバス講義。人類が
初めて経験する福島の諸課題に、それぞれの学問分野でど

のような取り組みがなされ、学問知が実践知としてどのよ
うに活用されているのかを学ぶことで、多角的な視点と課
題解決型の思考を養うことを目指します。そこで得られる
力は福島に限定されず、今後世界が直面する様々な課題に
応用可能なものとなるはずです。

地域で活躍するゲスト講師陣と考える課題解決

ふくしま未来学入門II

「ふくしま未来学入門II」では、復興の現場で活躍しておら
れる多彩なゲスト講師をお招きし、地域で実際に行われてい
る取り組みについて具体的に学びます。震災と原発事故は人
類の歴史に残る大きな出来事ですが、福島県内各地で多くの

人びとの手によって取り組まれている復興と地域再生の歩
みもまた、歴史に刻まれる力強いものです。その一端に触れ
ることで、課題解決型の思考を養うとともに、自らの進路に
ついて考える契機となります。

学生が身につける5つの力

「地域実践特修プログラム」では
次の5つの力の養成を目指し、
学習効果のデータ収集と、
エビデンスに基づいた
教育プログラムの改善を行っています。

※対象となる科目群の単位を取得することで修了と認定さ
れる本学独自のプログラムです。科目群の詳細などは、入学
後にシラバスや学修案内を参照してください。

1. 地域課題を発見する力

地域にあらわれる多様な課題を発見する力

2. 地域を分析する力

科学的にかつ総合的に地域課題を理解する力

3. 地域を興す力

地域課題のミッションを明らかにし、自ら主体的に解決
するために行動する力

4. 地域をつなげる力

地域課題を解決するために、多様なセクターと協働する力

5. 地域を伝える力

地域課題の社会的解決に向けて、現状や地域の主体的な
取り組みを外部に発信する力



1年 復興の現場を繰り返し訪れ
 学ぶフィールドワーク

地域実践学習 「むらの大学」

原発事故により避難を余儀なくされ、現在、復興と地域再生に取り組む地域(双葉郡川内村・大熊町、南相馬市小高区)を繰り返し訪れ、地域住民の方々との交流・調査(フィールドワーク)、そして地域の課題解決に向けた活動(サービス・ラーニング)を行う授業です。5月のガイダンスから1月の現地報告会まで、年間を通して学びを深めます。



3・4年 学類の枠を超え、活動を通して学ぶ

協働プロジェクト 学修

文系・理系の5つの学類が、一つのキャンパスで学ぶ福島大学。その特性を活かし、3年生以上を対象に「協働プロジェクト学修(学類を超えたプロジェクト学修)」を実施しています。被災地域の復興や地域再生に関わるプロジェクトを、学類の垣根を超えて実施することで、学生の専門性や地域問題の解決能力、他の専門性を有するメンバーとの協働力・学際性などを伸ばすことを目標としています。

プロジェクトの例

- 農村地域居住における若者の選好の調査解析(飯館村)
- 除染後農地の肥沃度低下調査と回復を考える(飯館村)
- 大熊町の営農再開に向けて考える(大熊町)
- 農スポ@南相馬(南相馬市)…など



2年 「むらの大学」で学んだ後は、自分たちで実践!

自主学修プログラム

1年次に「むらの大学」を履修した学生の多くは、2年次に「自主学修プログラム」として地域(双葉郡川内村・大熊町、南相馬市小高区)での活動を継続しています。自主学修プログラムは、学生が自主的にグループを組織してテーマ・内容を設定し、教員の指導のもとで学修することにより、単位が認定される制度です。多くの学生たちが、1年次に発見した地域の魅力や課題について「自分たちに何ができるか」を考え、自主的なプロジェクトを継続しています。

学生プロジェクト例

- 地域の特産品を使った六次化商品の開発
- 菜の花キャンドルの製造とイベントでの活用
- 災害公営住宅への定期的な訪問と交流
- 子どもたちとのふれあいを通じた地域活性化
- 祭礼やイベントの支援活動とアンケート分析
- 働く女性へのインタビュー冊子編集…など



全学年 地域を学ぶ、授業外のスタディツアー

みらいバス

地域と大学をつなぐ「みらいバス」は、学生・教職員を対象とした日帰りのスタディツアー。授業以外で地域を訪問するきっかけをつくるため、年間10回程度実施しています。被災地域の訪問・見学やボランティア活動を通じ、それぞれの地域の現状を学びます。

過去の「みらいバス」

- 東日本大震災・原子力災害伝承館(双葉郡双葉町)
- 震災遺構請戸小学校(双葉郡浪江町)
- JR大野駅および周辺市街地(双葉郡大熊町)
- 中間貯蔵施設(双葉郡大熊町)
- 川内村「かえるマラソン」ボランティア
- 浪江町 田植え体験と住民協働ワークショップ…など



「解のない問い」にチャレンジ

世界で学ぶ

国際交流

福島大学には、多彩な国際交流の機会が用意されています。多くの留学生が在籍しているのも本学の特徴。国際交流は、キャンパスの中からはじまっています。

今の自分から、一歩前へ バディ制度

活動期間：数日～6ヶ月程度

海外に留学してみたいけど不安がある。身近な場所ですぐに語学力を試したい。そんな皆さんに対応できるよう、福島大学には学生交流協定校から来る交換留学生・短期留学生のサポートをする「バディ」制度があります。バディとして留学生と関わることで、彼らの文化を直接感じ、福島にいらながら国際交流ができます。グローバル人材へのファーストステップとして貴重な機会となります。



多彩なプログラムで世界を学ぶ 短期研修・演習

開催期間：10日～3ヶ月

長期休暇を利用して行う短期研修・演習では、海外の協定締結大学で語学を学んだり、フィールドワークを体験することができます。例えば、コロラド州立大学ではアメリカの放射線研究について学ぶことができます。このほか韓国、中国、台湾、カナダ、ドイツでの語学研修など、多彩なプログラムが用意されています。2020年度以降は、オンラインで受講することができるプログラムも提供されています。



協定締結校への長期留学 交換留学

開催期間：半年～1年

本学は、大学間交流協定に基づき、海外の35大学と学生交流協定を締結し、「交換留学」を実施しています。「交換留学」とは学生交流協定校への長期留学で、福島大学のみに学費を納める必要がある留学を指します。国際交流センターが留学先との調整役を務めるので、留学の準備から留学中の相談、帰国後の単位の互換まで、さまざまな手続きも安心して行うことができます。



海外で働くために必要なことを学ぶ 海外インターンシップ

開催期間：約2ヶ月

2016年度からスタートした海外インターンシップ講座「WEA」は、「実際の現場で英語を使うことにより実用的な英語を身につける」がテーマです。海外で仕事をするには何が必要なのかを考えながら、海外で働くためのスキルや知識を学びます。その後、夏休みに渡米して、現地でインターンシップを行います。
例：Real English Business Internshipプログラム（テキサス・ヒューストンでの8週間のインターン）など



専門家の指導も受けられる 語学力強化

開催期間：毎日（月曜～金曜）

英語圏への交換留学などをを目指す学生に求められるのが、IELTS™やTOEFL™などの語学試験で目標スコアをクリアすることです。福島大学では、少人数制の語学力強化プログラムや、語学試験のコーチングで語学力アップをサポートしています。中でも国際交流センターが提供する「IT」は、語学試験対策の専門家によるきめ細やかな受験指導に人気が集まっています。



奨学金制度 について

「留学の費用に不安がある」という方も安心してください。福島大学には経済的な負担軽減を目的とした給付型の奨学金制度が準備されています。2019年度は121名の学生が奨学金を受給、留学を体験しました。

詳しくは、国際交流センターにお問い合わせください！

「自分をもつこと」を大切にして、
グローバル社会を生きていきます

Profile

経済経営学類
2022年卒業 経済学研究所1年 古川 絵梨さん
ハンガリー カーロリ・ガーシュバル・カルビン派大学
(2019年9月～2020年3月)
[福島県立郡山高等学校出身]

留

学目的の1つは英語力の向上です。日常的に英語を話す環境に身を置き、実践的な英語力を身につけたいと考えました。もう1つは、ハンガリーの歴史や文化を学ぶためです。モニュメント「ドナウ川遊歩道の靴」が語る歴史や、食文化、温泉文化などにも興味があり、現地を訪れることで多くを学びたいと思ったのです。

留学先では、英語学科の授業やハンガリー語を履修。ハンガリー語の授業は英語で行われるので、想像以上に苦戦しました。しかし、現地の友人たちと授業の復習や会話の練習をすることで乗り切ることができ、楽しい学校生活でした。学業以外では、現地のフェスに参加したり、欧州を旅行したり、今を存分に楽しもうと行動していました。日本でも行われるクリスマスや年越しのイベントも、現地ではお祝いの仕方が異なり、新鮮で楽しかったです。

このような留学生活で学んだのは、「自分をもつこと」の大切さです。授業中はもちろん、日常生活の中でも意見を求められる場面が多くありました。日本では、その場の空気を読むことが重視されることも多々あると思います。しかし、留学中は私自身がどう感じているのか、どうしたいのかといった答えを求められました。この学びは、今後このグローバル社会の中で、さまざまなバックグラウンドをもつ人々と関わる上で、意識しなければならないことだと思っています。今回こうした経験ができたのも、留学していた先輩方や、国際交流センターの方々のサポートのおかげであると感謝しています。



ルームメイトとイタリア旅行をした時の写真です。



後ろの建物はハンガリーの国会議事堂です。ライトアップされ、昼間とは違った美しさがありました。

Fukushima University International Center

国際交流センター

平日9:00-12:30 / 13:30-17:00



福島大学国際交流センターは、国際交流の窓口として学生の皆さんのサポートや、情報発信を行っています。ここでは、本学と学術・学生交流協定を締結している大学の情報や、留学の報告書なども閲覧することができます。また留学や語学学習に関する図書の貸出や、希望者には語学試験対策学習指導も提供しています。留学に関わる生活や学習の相談、在留資格、地域のイベント案内、手続きなどもここで確認することができます。



Fukushima Ambassadors Program

Fukushima Ambassadors Program (通称F.A.P.)とは、アメリカ、ドイツなどの海外の協定大学から福島に関心を持った留学生（これまで延べ209名）を約2週間のプログラムに招き、福島大学の学生とともに被災地をまわる短期留学プログラムです。2022年4月現在、福島大学を中心に600名以上の県内の大学生がプログラムアシスタントとして参加してきました。さまざまな背景を持つ学生たち同士が、ともに英語で福島の「過去」、「現在」、そして「未来」の課題について学び、理解を深めています。



「解のない問い」にチャレンジ

自分 を 知る

自分自身のことを知る

福島大学が大切にしているものの一つに「自己の振り返り」があります。自分自身の長所や特徴を知ることが、学びと自立の第一歩だと考えるからです。自分は何が得意なのか、特に何に関心があるのかを客観的に見つめることは、自分がどんな社会を創造したいのか、その未来にどんな方法で関わっていききたいのかに気づききっかけにもなります。

在学中は Semesterごとに学修目標を自分で設定し、どのような能力を伸ばすのか、どのように伸びたかを「見える化」し、自己評価(振り返り)を行います。この一連のサイクルを4年間繰り返すことで、学びと自己研鑽を深化させ、自身の取り組むべき課題を発見することができます。



自分の、地域の、 世界の未来を 想像してみよう

「解のない問い」にチャレンジ

未来 を 考える

皆さんが「未来」を考える土台を形成するために、本学では高校までの学びと大学での学修をつなげる教育体系として、「基盤教育」を充実させています。大学で学ぶ上で必要な基礎能力を身につけるための「接続領域」、幅広い教養の基礎を形成する「教養領域」、現実の問題をフィールドワークやグループ学修を通して解きほぐしていく「問題探究領域」を設定し、現状を分析する力や問題解決のための能力を丁寧に育みます。そして文系・理系を問わず、分析や問題解決のツールとしての基礎的な数学や理工学を理解し、社会に有益な知見を引き出すデータサイエンス教育にも力を入れています。

未来をつくるのは、皆さん一人ひとりの力です。自分が何をしたいのか、何ができるのか。地域や世界で、どんな未来を創造していくのか。福島大学でともに考え、学んでいきましょう。